

コラム 招聘研究員レポート

名前	所属	招聘期間
姚 琮	浙江工商大学 東亜研究院 日本文化研究所研究員	2016年5月16日 ~ 2016年6月5日
黄 亜欣	華東師範大学 中国非物質文化遺産保護研究中心	2016年9月20日 ~ 2016年10月10日
ジアダ リッチ	フランス 国立高等研究院 東アジア文明センター	2016年10月4日 ~ 2016年10月24日
西江 桂子	サンパウロ大学 日本文化研究所	2016年10月5日 ~ 2016年10月25日
周 全明	北京師範大学 中国民間文学研究所	2016年10月10日 ~ 2016年10月30日
陳 熙	中山大学 中国非物質文化遺産研究中心	2016年12月4日 ~ 2016年12月23日
金 鎮星	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科	2016年12月7日 ~ 2016年12月23日
任 仁宰	漢陽大学校 歴史学科	2017年1月23日 ~ 2017年2月12日

疫神の足跡を探る道

姚 琮
(浙江工商大学)



この度、神奈川大学非文字資料研究センターの訪問研究員として、5月16日から6月5日まで「中世における日本の疫病退散儀礼研究」というテーマで研究を行いました。3週間という短い日程でしたが、指導教官の小熊誠先生、非文字資料研究センター事務室の成田紅音さんをはじめ多くの方に大変お世話になりました。おかげさまで、研究テーマに関する論文・書籍資料を手に入れられ、何カ所もの調査地に赴き、関連研究分野の研究者を訪問することもできて、充実した研究成果が得られました。それらの成果は次の三つに分けられます。

まず、神奈川大学図書館や国立国会図書館に所蔵されている「中世の疫病退散儀礼」の資料を手に入れたことです。中世の疫病退散儀礼を研究するうえで、中世の国家及び儀礼全体の把握は欠かせないため、『中世の国家と天皇・儀礼』、『古代中世の社会変動と宗教』、『中世武家儀礼の研究』などの書籍も収集できたことは非常にありがたいことでした。

次に、疫病退散儀礼を行う日本各地の神社を回ったことが挙げられます。今回は期間が限られているので、代表的な調査地を選んで現地考察を行いました。最初の調査地は愛知県津島市にある津島神社です。日本全国の津島神社・天王社の総本社である津島神社では毎年7月に「天王祭」が行われます。名鉄津島駅を出ると、7月まで1カ月ほどあるにもかかわらず、「天王祭」と書いてある神社の旗があちらこちらで目につきました。建速須佐之男命と牛頭天王という疫神に深い繋がりを持つ天王祭は、中世から祭神の牛頭天王を祀り、地域の無病息災を祈る行事として脈々と受け継がれてきました。



写真1 津島神社

津島神社の後に京都の北野天満宮へと足を延ばしました。北野天満宮の祭神である菅原道真はその怨霊が神と結び付けられました。そのため、大災害が起きるたびに道真の祟りと思われ、道真を祀れば災害が鎮まるというような「天神信仰」が日本全国に広まりました。

また、菅原道真は災いを鎮める神であると同時に学問の神でもあります。そのため、修学旅行中の中学生とおぼしき集団に多く出会いました。

北野天満宮の後に、京都の御霊神社・八坂神社・神泉苑へ行きました。この3カ所はいずれも疫神の牛頭天王と建速須佐之男命とは深い関係があります。御霊神社は日本全国にある「御霊信仰」総本社で、毎年夏に疫病退散を祈願する「御霊祭」が行われます。京都には上御霊神社と下御霊神社があり、今回は上御霊神社のみ調査を行いました。また、八坂神社は各地にある「八坂神社」の総本社で、祇園祭を行う神社として広く知られていま



写真2 北野天満宮

す。最後に訪れた神泉苑は、平安時代に流行した疫病の原因と思われる御霊を鎮めるための「御霊会」を行った場所です。毎年7月には今でも「御霊会」が行われています。

その他にも、関連研究分野の研究者を訪問することができました。佐野賢治

先生のご紹介で、疫神信仰を深く研究されている神奈川大学外国語学部の山口建治先生や、民俗学の視点から日本の民間信仰を研究なさっている大島建彦先生を訪問するなど貴重な機会を得ました。また、指導教官である小熊誠先生を含めそれぞれの先生から、直近に出版され



写真3 神泉苑

た著作をいただきました。

わずか3週間という短い期間でしたが、充実しており多くの収穫がありました。今回の訪問研究が、これからの研究活動に大いに役立つものと確信しています。最後に、訪問研究期間中にお世話になった神奈川大学の諸先生方、そして非文字資料研究センターのスタッフの皆様にあらためて感謝を申し上げます。

日本の現代社会における伝統生活様式の伝承について

黄 亜欣
(華東師範大学)



2016年9月20日から10月10日までの日程で神奈川大学を訪問し、滞在中に横浜中華街、東京国立博物館や江戸東京博物館、鎌倉の鶴岡八幡宮および北野神社(山崎天神)、日本民藝館、国立歴史民俗博物館などを巡り、研究調査を行った。幸いなことに、日本民俗学会第68回年会に参加する機会をも得た。また最後の3日間は佐野ゼミの合宿旅行に同行し、安雲野と松本を訪れた。

今回の訪問目的は日本の現代社会における伝統生活様式の伝承を調べることである。現地調査を通じ、伝承と保護の面で参考になるところが多いと感じたため、以下で具体的に述べたい。

一、伝承者の保護を重視している

現地調査をした際、民俗行事に参加する人の中に数多くの小中学生を見た。北野神社での行事の演奏者は大体が青少年たちであった。菅生神社で獅子舞を踊るのは中学生であり、参加者の中には小中学生も多く含まれていた。小さいころから民俗行事を大事にする意識が育まれ、彼らは主体的に参加するよ

うになったのだろう。その結果、民俗保護とは、政府や関係機関のみが取り組むという特殊なものではなく、一般市民の日常生活の一部として深く入り込むことになったと思われる。



写真1 鎌倉北野神社神楽の上演